



学校だより

10月号 令和8年9月30日

見て見て、聞いて

校長 西口 公恵

校内を歩いていると、子どもたちからよく声を掛けられます。「校長先生、見てください。」「図工の作品が出来たよ。すごいでしょ。」「今から音読発表をやるから、聞いていってください。」「習字を書いたよ。校長先生も書いてみる？」と、どの子どもとても嬉しそうに話しかけてくれるので、つい足を止めてしまいます。子どもたちは、自分が頑張ったことや発見したことを誰かと共有したいという思いをもっています。その姿に出会うたび、子どもたちの成長を嬉しく感じています。

先日、1年生が生活科で砂遊びをしていました。泥だんごを作ったり、水を流して川を作ったり、友達と協力してトンネルを掘ったりとみんな夢中になって活動していました。「どうしたら泥だんごが固まるのかな？」「こっちの泥の方が固まるよ。」「水を流したら川がつながった！」「もう少し掘ってみよう。」子どもたちは友達と話し合いながら、何度も試していました。うまくいかなくてもあきらめることなく、「次はこうしてみよう。」と考え、挑戦を続ける姿が見られました。このような姿は、学校で大切にしている学びの姿そのものです。子どもたちは自分で考え、友達と関わり、実際にやる中で多くのことを学んでいます。そして、その学びの出発点には「なぜだろう？」「やってみよう。」という素直な興味や関心があります。

次期学習指導要領でも、「主体的・対話的で深い学び」が大切にされています。難しく聞こえる言葉ですが、その姿は特別なものではありません。自分からやってみようという思いをもち取り組む「主体的な学び」、友達と思いを伝え合い、新たな考えを構築していく「対話的な学び」、そして試行錯誤を重ねながら新しい発見につなげたり、考えを深めたりしていく「深い学び」です。こうした学びの土台となるのは、子どもたちの豊かな体験や生活経験です。AIやSNSの普及など社会が大きく変化する今だからこそ、学校で仲間と関わりながら学ぶことの価値はますます重要になっています。また、他者と関わりながら小さな問いにこだわること、「なぜだろう？やってみよう。」と素直に純粋に学ぼうとする姿勢が大切だということも重要だと考えます。ご家庭でも、お子さんが作品や学習の成果を見せてくれたときや小さな疑問をもっているときには、ぜひ耳を傾け、言葉を掛けていただければと思います。その温かな対話が、子どもたちの次の意欲や学びにつながっていきます。

爽やかな秋を迎えました。子どもたちの小さな発見や問い、挑戦を大切にしながら、一人ひとりの学びを育んでまいります。